

復活節第2主日（神のいつくしみの主日）

福音朗読 ヨハネ 20・19-31

2023.4.16 9:30 ミサ
カトリック高円寺教会
主任司祭 高木健次神父

今日、復活節第2主日は「神のいつくしみの主日」とされています。「聖書と典礼」にもそのように括弧して書かれていると思います。この「神のいつくしみの主日」というのは20世紀前半、1930年代に、ポーランドのシスターにイエス様がヴィジョン、ご自分の姿をお示しになって、そして「復活祭の次の日曜日を神のいつくしみを思い起こす主日と定めなさい」とお告げがあったと、そのような出来事を元にしていて、2000年、大聖年の年にヨハネ・パウロ二世教皇によって全教会に対して定められたということになっています。

皆さんも ご絵 でご覧になったことがあると思います。暗闇の中で白く光り輝くイエス様ご自身が、槍で刺し貫かれたご自分の胸の傷跡を左手で指し示し、そしてその傷跡から白と赤の光線が発しているというものです。そして右手は司祭がミサの中でするような祝福をする手になっている、というそういうイメージ、イエス様がポーランドのシスター、聖ファウスチナにお示しになったヴィジョン、姿に基づいて神のいつくしみを思い起こすように招くのが今日の主日です。もちろんイエス様の胸から出ているその白と赤の光線というのは、ヨハネの福音書で十字架上で亡くなられたイエス様の胸を兵士が槍で突いたときに血と水が流れ出た（ヨハネ 19・34）というその記述に基づいているわけです。血と水というのは、両方とも聖霊を表わしていると解釈されています。

そのように神様のわたしたちへの愛というのは、その傷跡を通して、つまりその苦しみを通してわたしたちに注がれるのだ。イエス様は、そして父である神様は、わたしたちが苦しんでいるということに対岸の火事のように無関係にいらっしゃって、ただ「こちらにおいで」と呼んでいらっしゃるのではなく、まずご自分が苦しむということを通してわたしたちを愛される、そのお姿を示していらっしゃるということです。

傷跡を通して愛が注がれるということは、わたしたち自身も自分たちの愛を振り返るときに大切な点を思い起こさせてくれると思います。ほんとの意味で愛するということには痛みや苦しみが伴うということです。大切に思う人が苦しんでいる、悲しんでいるならば、それは自分にとっての痛みや悲しみにもな

るということもあるし、また本当に相手を愛するということは、その相手の自由を完全に受け入れるということです。その自由の中には、こちらが差しだそうとしている愛や愛の行いに対してこちら側が期待するような応答をしない自由も含まれている、ということです。もっと言うならば、わたしたちが相手を愛していても相手はその愛に愛を返さない自由もある。そのことも合わせて受け入れる。そこには当然苦しみもあります。まさに十字架上のイエス様、また、その傷口から聖霊を注がれるイエス様は、そのような愛をもってわたしたちを愛されるということだし、更に言うならば、人と人との関係では特に相手にとって自分が全てではないということを受け入れるということでもあります。

そこで、わたしたちは単に相手を自分のものにしたい支配欲と、それから相手と共にあろうとする愛を、一見見分けがつかないんですけど、区別する必要があります。支配欲も本当の愛も痛みを伴います。しかし相手にとって自分が全てではない、つまりはわたしたちの知らない世界や側面がある、あるいはそういう繋がりがあるといいうことも含めて受け取って行くというということからくる痛みなのか、ただ相手が自分の思い通りにならないということに対する不満からくる痛みなのか、それを見分ける必要があるし、わたしたちは、ほんとの愛と相手に対する支配欲ということを区別するために、ご自分の傷跡から聖霊を注がれるイエス様に繋がって行く必要があるというわけです。

自分の思い通りにならない相手をそのまま受け取るということは、実は神様がわたしたちに向けてくださる愛であると同時に、その神様の愛にわたしたちの側が応える道でもあります。それはイザヤの預言にあるように、神様は「わたしの思いは、あなたたちの思いと異なり、わたしの道はあなたたちの道と異なる」(イザヤ 55・8) ということばがありますけども、神様を愛する、あるいは神様の愛に応えるとは、そのように神様がいつもわたしたちの思い通りに出来事を与えてくださるわけではないということを受け取るということに繋がるからです。

いろんなことが思い通りにならない。でも神様の思いが、わたしたちを超えて、神様の御計画が実現していく。それがほんとの意味で良いことなんだというふうに、ある意味で自分に言い聞かせて、その現実を受け取ろうとするときに、やっぱり痛みがわたしたちの心にあります。でも、そのように受け取るときに、それはあきらめと現状に流されていくということではなく、わたしたちは自分の希望に従って、いろいろな形で努力し工夫していく、そういう務めもありつつ、それでも思い通りに全てがならない、そのときには「神様のみ旨、御計画は他に

ある」として、信頼のうちに委ねる。それが神様の愛にわたしたちが応える、わたしたちの神様への愛の道であるということができると思います。

そのようにしてイエス様の傷跡にわたしたちも自分の傷をもって応えていく、繋がっていくということ。主に繋がる。今日の福音書で言うならば、イエスを信じてイエスの名によって命を受ける（ヨハネ 20・31）ということになる。わたしたちがほんとの意味で愛し、そして生きる者とされていく道であるといえるのではないかと思います。

ですから、神のいつくしみというのは、神様が何でもわたしたちの思い通りにしてくださるということではなく、神もわたしたちもお互いに痛みを持って、この地上のまだ完成しない歩みにおいては痛みを持って相手を受け取り合うという関係の中にほんとの意味で命があるんだということを思い起こす日でもあると言えるのではないかと思います。それは簡単な道ではないけれど、でも絶えずご自分の傷跡から恵みを注がれるイエス様のお姿を思い起こすことを通して、わたしたち自身が自分の与えられた命を本当の意味で受け取って行く者となる、その恵みを願いたいと思います。

このごミサを通して、改めて、イエスとの繋がりがその傷跡に繋がり、その傷跡から流れ出る愛に繋がり、その愛によってわたしたちが神様との関係、また他の人との関係、自分自身との関係、自分が置かれた今の状況との関係の中に希望を見出すことができますように、このごミサの恵みを頂きたいと思います。

ミサ説教はカトリック高円寺教会ホームページの「ミサ説教」のページにも掲載されています。

PC <http://www.koenji-catholic.jp/cgi-bin/wiki/wiki.cgi>

携帯 <http://www.koenji-catholic.jp/mobile/>